

<論文> 『銀河鉄道の夜』論：成長物語としての構造

著者	内田 寛
雑誌名	日本文学誌要
巻	63
ページ	45-53
発行年	2001-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020148

『銀河鉄道の夜』論

——成長物語としての構造

内田 寛

1 ジョバンニの「成長」とは何か

宮澤賢治『銀河鉄道の夜』は、多くの論者によって、作者の宗教的理想が込められた物語であるとの指摘がなされている。主人公ジョバンニの成長は、『農民芸術概論綱要』の「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」という命題に対応したものであるとされ、最後にジョバンニはカムパネルラという個への執着を脱却し、大きな宇宙的愛、宗教的愛、に至ったのだという読まれ方をしている。

たとえば西田良子氏は『法華経』を援用して『銀河鉄道の夜』の物語世界を解説している。そして「ジョバンニが目ざしたのは、〈あらゆる人の幸せ〉のために、〈十界〉を自由に行き来して、衆生を苦しみから救い、ともに無上道を目ざす〈菩薩の解脱〉だったに違いない。」と述べている。^{注1}

西田氏のいう、ジョバンニの「〈菩薩の解脱〉」への過程を、多田幸正氏は物語の進行に沿ってまとめ、ジョバンニは「自立した求道者（を予測させる者）^{注2}」として生まれ変わるのである。」と結んでいる。

以上のような解釈は『銀河鉄道の夜』を賢治の宗教的理想物語として読むならば、おそらく正当な読みといえるものである。しかし私は、これらの解釈に違和感を抱かざるを得ない。

まず、十歳やそのらの少年ジョバンニが、「無上道」や「菩薩の解脱」あるいは「求道者」といった高度な宗教的理念を表わすことばと結びつけられて論じられていることである。この作品は「少年小説」^{注3}であり、対象にしているのは、ジョバンニと同じく十歳前後の少年少女たちである。そんな読者たちにたとえば教師が、「この話は菩薩の解脱によって無上道を目指す求道者の物語なのだ。君たちも菩薩の解脱を目指しなさい」などと言ったら、彼らは逃げ出してしまわないだろうか。逃げ出さないまでも彼らはこう思うかもしれない。「それは素晴らしいお話だと思います。でも平凡な僕たちには関係のないお話です」

また、多田氏が示すように、ジョバンニが個への愛から全体への愛へと段階的成長を遂げていったとする理解の仕方もどうかと思う。テキストを細かくみていけば、ジョバンニの心境は刻一刻と変化し、迷走し、まさに身をよじりのたうちまわっていることが見て取れるのである。ジョバンニの心の動きは、多

田氏のいうように、一步一步成長の階段を上っていくようなものではない。

この違和感の根源は、これらの解釈にみられる過剰な飛躍であるようだ。この両氏はじめ多くの論者は、なぜ十歳やそのらの少年を「求道者」に飛躍させたがるのか。少年の心はまだまだ未熟で不合理に満ちており、この『銀河鉄道の夜』という作品の文学的価値は、その少年の心理を抒情的に、しかし生々しく開示してみた点にあるのだ。

私はこの物語からは、もつと普通の少年の普通の成長を読み取るべきだと思う。そうでなければこの作品の持つ普遍的価値には触れられないと思うからである。

『銀河鉄道の夜』という物語を貫いているのが、ジョバンニの〈成長物語〉という基本線であることは疑いがないところであろう。次項からは、ジョバンニとカムパネルラの関係に注目しながら、『銀河鉄道の夜』における〈成長物語〉とはどんなものであるのかをみていきたい。

2 ジョバンニとカムパネルラ

ジョバンニとカムパネルラの前史は「三、家」の、ジョバンニと母親との会話で明らかにされている。

ジョバンニの父とカムパネルラの父は友人であり、そのためジョバンニも父に連れられてカムパネルラの家へよく遊びに行っていた。しかしそれはもはや過去のことである。ジョバンニは「あのころはよかったなあ」と言っている。現在のカムパネ

ルラとの関係は「あのころ」とは同じではない。二人の間には距離ができてしまっている。もちろんジョバンニのカムパネルラに対する思いは現在も変わっていないので、離れていったのはカムパネルラであろう。

そしてカムパネルラは今やジョバンニを嘲弄、疎外するザネリの集団の側にいる。しかしカムパネルラは積極的にザネリに加担してジョバンニを迫害するわけではない。

「一、午後の授業」で、先生は生徒たちに、空にかかる天の川は本当は何か、という発問をする。カムパネルラが真っ先に手をあげ、数人の子がそれに続く。ジョバンニは手をあげるのを躊躇したところを先生に指名されてしまう。彼は「星である」という答えを知っていたのだが、なぜか答えられない。困った先生は次にカムパネルラを指名する。ところが真っ先に手をあげたカムパネルラもやはり答えないのだ。先生は仕方なく「星である」という問いの答えを自分で述べる。そのあとの本文は次のとおりである。

さうだ僕は知つてゐたのだ、勿論カムパネルラも知つてゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。(中略)それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐ返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午後も仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになつたので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、さう考へるとたまらないほど、じ

ぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのです。このような記述により、カムパネルラが答えなかったのはジョバンニに同情したからだ、という理解が生じる。

しかし引用した本文はジョバンニの内言なのである。この物語は三人称で語られているが語り手は限りなくジョバンニに寄り添っている。つまりここでは語り手は決してカムパネルラの内面を捉えているわけではないのである。従って自分への同情や友情でカムパネルラが答えなかったとするのは、あくまでジョバンニの側の一方的な解釈なのであり、ジョバンニが「さう考へ」ただけのことなのである。現実にはさうであつたかもしれないしさうでなかったかもしれない、というしかない。

ではさうでなかったとしたら、なぜカムパネルラは答えなかったのか。それに対してはいくつかの理由が考えられるが、可能性の大きいものとしては、自分と同じ答えを有しているはずのジョバンニが沈黙しているの、自分の考えも誤りなのではないかと思つた、などが挙げられるだろう。つまらない理由かもしれないが、こうしたことは教育現場では見受けられないことではない。しかしここで私が強調したいのは、カムパネルラの真意はわからない、ということである。

では現実のカムパネルラとジョバンニとの関係はどのようなものであつたのか。二人は幼なじみであつたが、現在では距離が認められる。ではなぜ距離ができてしまつたのか。というのが正解であらう。

キーポイントは互いの父親が友人同士だつたということである。つまりジョバンニとカムパネルラの関係は、上から与えら

れたものであつたということである。幼いうちは生活圏が狭い中で与えられた相手と接してゆくしかない。二人の気が合えば関係は継続してゆくだろうが、それほどでもない場合は、年齢を重ね、生活圏が拡大してゆくにつれて、より気の合う仲間を自分で見つけ、気の合わない幼なじみとは離れてゆく。カムパネルラが外向的性格であり、自然に生活圏の拡大を志向したのに対し、おそらくジョバンニは内向的性格であり、二人の世界を維持することを求めたのであらう。カムパネルラはそんなジョバンニを見限り、二人の世界を解消し、より広い世界を獲得したのである。カムパネルラは今やジョバンニと二人でいるより、ザネリたち大勢の仲間と遊んでいる方が楽しいのだ。

ジョバンニに大きな衝撃を与え、銀河鉄道の旅への直接のきっかけとなつたのが、「十字になつた町のかど」でザネリたちに嘲笑されるといふできごとであつた。

ザネリにからかわれることは何もそれが初めてではない。しかしここでジョバンニを嘲弄する集団にはカムパネルラの姿があつたのだ。カムパネルラはさすがにザネリと一緒にジョバンニをからかいはいはしない。しかしザネリを制することもしない。ただ無言である。もしカムパネルラがジョバンニに友情を持っていたとするなら、これは背信行為以外の何物でもない。

さらにジョバンニが「十字になつた町のかど」から駆け出した直後、振り返つてみたらカムパネルラは皆と一緒に口笛を吹いていたのである。彼がジョバンニに少しでも友情を持っていたのなら、彼にとつてもこの一件はそれなりに衝撃的だつたはずであり、このように何事もなかつたような態度をとれるはず

がない。

確かにカムパネルラは積極的にザネリに加担しなかった。そこに望みはあるかもしれない。自分の所属集団がある者を排斥している時、それを制止することは難しい。次には自分が排斥の標的になる可能性があるからだ。

しかしそれはカムパネルラが集団内の周縁部に位置している場合のことである。授業中、カムパネルラは真つ先に手をあげていた。そして授業が終つてジョバンニが学校を出る時、この級友たちは、「カムパネルラをまん中にして」星祭の相談をしていた。つまりカムパネルラは公私共に集団の中心人物であったのだ。その気になればザネリを制止することなどたやすい地位にいたのだ。それなのにジョバンニを救わなかったのである。

このことでもっと恐ろしい想像もできる。常識的に考えてザネリたちはジョバンニが、自分たちのグループのリーダー的存在であるカムパネルラのおさなじみであったことを知っていたはずである。それにもかかわらずカムパネルラに遠慮することなくジョバンニを疎外しているわけであり、そうだとすると、この状況の裏には、カムパネルラの黙認が公然と存在していることが想像できる。つまりザネリたちのジョバンニいじめはカムパネルラの意志なのではないかという想像も可能なのである。しかしここでこれ以上カムパネルラを追及することはやめておこう。

少なくともここに至って現実のカムパネルラは既にジョバンニに対する友情を失っているということがはっきりしたのではないだろうか。

ジョバンニを棄てることにより、より広い世界を獲得したカムパネルラ。そしてそれを認めようとはせず、いまだにカムパネルラと自分は友情で結ばれているんだと信じているジョバンニ。これがジョバンニの置かれている現実である。

3 ジョバンニの〈闇〉

第三次稿から第四次稿への過程で、ジョバンニとカムパネルラの関係も書きかえられた。

第三次稿までにおいては、ジョバンニとカムパネルラは幼なじみではなかった。ジョバンニはカムパネルラの友達といえる存在になつていず、カムパネルラはジョバンニにとって一方的な憧れの対象である。

一方的な憧れの対象であるカムパネルラに救ってもらえなかった第三次稿のジョバンニと、元親友のカムパネルラに突き放された第四次稿のジョバンニと、どちらの心の傷が深いと考えるべきか。私は当然後者だと思う。第四次稿のジョバンニの孤独は、第三次稿のジョバンニの孤独が童話によくある「かわいそうな主人公」のレベルに止まっているのに対して、はるかに複雑で根源的な意味を含んでいると思うのである。ではこの設定の変更はどんな意味を持つのであろうか。

もし二人の関係が、ジョバンニの一方的な憧れだけのものではあつたなら、それは人間関係というほどのものでもなくなり、カムパネルラの行為も背信行為というほどのものではなくなる。そしてジョバンニの孤独は何も今に始まったことではなく、過

去からずと孤独だったことになる。そんなジョバンニにとって銀河鉄道の旅とは、憧れていた夢の実現であり、欲望の解放であった。そして夢の最後のカムパネルラの消失は、夢は夢であって現実ではないことの認識であり、ジョバンニは夢の消失と引き換えに、ブルカニロ博士から新たな人生の目標を授かるのである。

しかし第四次稿に至り、ジョバンニとカムパネルラが幼なじみであったとする設定に変わると、問題は根本から違ってくる。幼い日、友情を誓い合ったであろうカムパネルラの離反は、人間関係の不確実性、人間というものの不確実性を示している。そのことはジョバンニの心に、第三次稿とは全く異質の暗い影を落す。

しかしジョバンニはカムパネルラへの強い思いをいまだに抱いている。そして今でもカムパネルラは自分のことを思ってくれていると信じている。先生に指名された時の無言、ザネリたちが自分をからかった時の無言、それらがカムパネルラの友情の証だ。しかし、と一方でジョバンニは思うはずである。カムパネルラはなぜ疲れている自分にひとこと励ましのことをばをかけてくれないのか、クラスから疎外されている自分をなぜ救おうとしてくれないのか。

ジョバンニは感受性の鋭い少年である。カムパネルラの友情を信じる一方で、私が述べた現実を意識と無意識の間でうすうす察知していたのではないだろうか。そしてジョバンニの内面に対立するこの二つの認識が、銀河鉄道の幻想旅行を生み出すのである。

ジョバンニは現実世界においてカムパネルラとは今でも親友だと思っていた。それは意識的なものであり、いかなれば彼の自我であるのだが、それは彼の欲望と未分化の全一的な「幼児的自我」であった。そのような彼の「幼児的自我」が現実世界となじまなくなってきたというところに彼の問題があったのだ。このような欲望と未分化の「幼児的自我」が銀河鉄道の旅という意図的な夢によって満足を得ようとするのである。

しかし第四次稿における銀河鉄道の旅がフロイトのいう「空想」^{注4}ないしは「覚醒夢」と異なる点は、それがジョバンニの欲望の無制限な解放ではないということである（第三次稿の設定であったなら、銀河鉄道の旅の意味は、よりフロイト的であるといえるだろう）。

そこには快樂原則に基づいた「幼児的自我」を制御する、「新しい自我」の目が光っているのである。この「新しい自我」とは、彼の意識と無意識の間、つまり前意識的なものであり、現実のジョバンニがうすうす感じていたもの、しかし認められなかったもの、つまり「カムパネルラはもう昔のような親友ではない」という現実を受け入れる自我である。

銀河鉄道の旅の意味を要約して述べるならば、ジョバンニの「新しい自我」が「幼児的自我」を駆逐し、取って代わる過程であったといえる。銀河鉄道の旅はこの目的を遂行するための意図的な夢であったのである。そのような意図の主体は第三次稿においてはブルカニロ博士であった。そして第四次稿においてその主体はジョバンニ自身を措いて他にはない。第四次稿とは少年が自力で成長していく物語なのである。

4 〈幼児的自我〉と〈新しい自我〉

銀河鉄道の旅とは、ジョバンニという主体の意図的な夢であった。その目的は、意識の中心に居座っている〈幼児的自我〉をなるべく納得ずくでその座から追い落とし、代りに〈新しい自我〉をその座につけることである。ここでジョバンニの〈幼児的自我〉と〈新しい自我〉についてもいちど整理しておく。

〈幼児的自我〉――親から受けた無条件の愛によって形成された自我。自分が世界の中心にいるという感覚を持っている。自己を絶対化しており、他の人間も自分と同じ考えを持っているはずだ、という独我論的幻想を持っている。具体的には昔の親友カムパネルラと疎遠になっているのにまだに親友であり続けていると信じており、幸福だった〈二人の世界〉への復帰を切望している。

〈新しい自我〉――現実認識的な自我であり、自分が世界の中心にいるわけではないという現実、周囲の人間は自分とは違った様々な考えを持っているという相対性を認識しようとする。カムパネルラとの関係についても、もはや昔のままの関係ではないことを察知している。

銀河鉄道の旅とは、ジョバンニの内にあるこの二つの自我の交代劇であったのだ。そしてその交代劇は、現実世界での二人の歴史の再現という形をとる。

以下、両自我の攻防、及び二人の歴史の再現という観点で、銀河鉄道の旅を概観する。

①【銀河ステーション】

旅の始まりの光の洪水によって、ジョバンニの直前までの暗く悲しい記憶は封印され、〈幼児的自我〉の願望が全面的に実現される。〈新しい自我〉は周縁部に退き、車内の壁の二つの「大きなぼたん」となって見守るのみである。カムパネルラとの幸福な〈二人の世界〉の再来にジョバンニの〈幼児的自我〉は有頂天になり、「まるでどきどきして、頭をやけに振」る。

②【北十字とプリオシン海岸】

〈幼児的自我〉の願望はさらに解放され、カムパネルラを連れて列車から降りるという行為に出る。銀河鉄道の旅はジョバンニという主体の意図的な夢であり、ジョバンニは銀河鉄道に乗って旅することによって自らの意図を達成するのだから、銀河鉄道こそはその意図のシンボルであったといっている。するとこの下車は意図からの逸脱と考えられる。もしこのとき〈幼児的自我〉がカムパネルラを連れただまま銀河鉄道に戻らなければ、ジョバンニは永遠に幻想世界の住人になっていたかもしれない、危険な時間帯であったのだ。

そのような〈幼児的自我〉の暴走に対して〈新しい自我〉は、ジョバンニに牛の祖先の化石を見せる。ジョバンニが母親の牛乳を取りに行っている途中であることを暗示し、この幻想世界には牛の熱い乳は存在せず、その化石があるだけだ、というメッセージを送る。さらに、大学士によって「ぼくらから見ると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐる前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみ

でもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ。」と、認識とは人それぞれで違うのかもしれないという相対性を説く。

しかし「幼児的自我」が優勢なため、大学士とのやりとりは滑稽味を帯び、幸福な時代の雰囲気は続く。それでも「新しい自我」は「幼児的自我」を列車に戻すことには成功する。

③【鳥を捕る人】

「幼児的自我」が維持していかうとする「二人の世界」に揺さぶりをかけるため、「新しい自我」は鳥捕りという第一の侵入者を登場させる。鳥捕りは大学士の後を受けるように、「幼児的自我」の常識を揺さぶる言動を行なう。「幼児的自我」はまだまだ優勢を保っているが、純然たる「二人の世界」の時代は終りを告げ、侵入者の時代に突入する。

現実世界においても幼なじみでお互いしか友人がいなかった時代から、たとえば学校への入学を機に「二人の世界」へ侵入してくる者が現れ始めたと思われる。たとえばザネリなども侵入者のひとりであっただろう。

④【ジョバンニの切符】

「新しい自我」は車掌を登場させ、「幼児的自我」を追い詰める。しかし「幼児的自我」は「おかしな十ばかりの字」が印刷された切符を出し、窮地を切り抜ける。その切符は「どこまでも」カムパネルラと一緒にいたいという「幼児的自我」の願望が反映した万能の切符であった。

危機をしのいだ「幼児的自我」は再び盛り返し、侵入者である鳥捕りを消失させる。現実の歴史の中でも、ジョバンニは「二人の世界」に入ってこようとする者をこのように排斥したのだと思われる。しかし一方で「幼児的自我」は自分の排斥行為に、「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は太へんつらい。」という罪悪感を抱き始めている。「幼児的自我」は自らが作った歴史をなぞりながら、その功罪を吟味しているのである。まさにそのことこそが銀河鉄道の旅の目的なのであり、「幼児的自我」が自らの不合理に気が付き、自主的に撤退すること「新しい自我」は待っているのである。

⑤【青年と姉弟―苹果】

青年一行は「新しい自我」が登場させた第二の侵入者であり、最終的な侵入者である。彼らの乗車によって列車内には小さな共同体が形成されるが、「幼児的自我」は配られた苹果の受け取りを拒否したりして、頑なに「二人の世界」を堅持しようとする。しかし当のカムパネルラは素直に共同体へ溶け込もうとするのである。

⑥【赤帽の信号手】

「二人の世界」を守ろうとするジョバンニの意に反して、カムパネルラは青年一行の少女かほると親しくなる。これに嫉妬したジョバンニは、かほるを拒否し、自らが孤立してしまう。

現実世界でもクラス仲間と交流を広げて行くカムパネルラと、「二人の世界」にこだわり続けるジョバンニにはこのような不調

和があつたと思われ、そのたびにジョバンニは孤立していったのであろう。始めは些細な孤立であつたかもしれないが、それが繰り返されることにより、現在の疎外的状況に立ち至つたのだと思われる。

⑦【新世界交響楽】

〈新しい自我〉はごつごつした高原へ列車を導き、悪条件の中立派に手入れされたとうもろこし畑を見せることにより、ジョバンニに今後の生き方を暗示する。それは「幻想というユートピアにいつまでも閉じこもるのではなく、厳しい現実の上に自分の理想を築かなくてはならない」というものであり、新たな自己の生の開拓を象徴するかのように「新世界交響楽」が流れる。

⑧【空の工兵大隊】

一方〈幼児的自我〉は、スピードや発破の爆発といった活劇的な状況を招くことによつて活性化し、陽気に転じ、少女とも親しくなることに成功する。

現実世界でも拡大化するカムパネルラの交友関係に対応するため、このような努力が成されていたと考えられる。それでジョバンニの交友関係も拡大したように見えるのだが、その底にあるのはやはりカムパネルラとの〈二人の世界〉への復帰の熱望であり、カムパネルラの友達と自分も友達になることとは、〈二人の世界〉を失わないための方策に過ぎないのである。

⑨【蜷の火】

〈新しい自我〉は「まことのみんなの幸」を願つて死んでいった蜷の話少女に語らせ、ジョバンニに今後の生き方の指針を与える。

⑩【サウザンクロス】

青年一行がサウザンクロスで降りる前にジョバンニと交わした神さまについての論争は、〈他者〉の存在を〈幼児的自我〉に強く印象付けた。

幻想旅行を通じて〈新しい自我〉が〈幼児的自我〉に言おうとしているのは次のようなメッセージである。

「君はカムパネルラといつまでも一緒にいたいんだろうけど、それは無理なことなんだよ。君がカムパネルラを必要としているのと同じようにカムパネルラも君を必要としていると思つたら大間違いだ。カムパネルラは君じゃない。君とカムパネルラは別の人間なんだ。人間はそれぞれ考えていることが違うのさ。見えているものも違うんだ。カムパネルラにはカムパネルラの道があり、君には君の道がある。君は自分の足で自分の道を歩かなければならない。さあ、カムパネルラにさよならを言うんだ」

〈新しい自我〉はサウザンクロスで青年一行を降ろすが、実はこのときカムパネルラも降ろしてジョバンニと別れさせるつもりではなかったかと私は思う。この旅がカムパネルラと訣別するための旅であつたとしたら、その訣別の場所としては印象的なサウザンクロスこそがふさわしいと思えるからである。

しかしカムパネルラはサウザンクロスでは降りなかった。《幼児的自我》はカムパネルラを手離すことができなかったのである。《幼児的自我》は最後の抵抗を試みたのである。

⑪【石炭袋】

《幼児的自我》は自らの不合理性を既に認識している。それは「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一諸に行かう。」と言いながら、それだけではカムパネルラの同意が得られないことを予測して、続けて「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない。」という《新しい自我》のことばを付け加えたことに表れている。

それでも《幼児的自我》はお題目のようにカムパネルラに「一諸に行かう」と繰り返す。しかしカムパネルラはうわの空で、自分には見えない「ほんたうの天上」を見て感銘を受けたりしている。ここに《幼児的自我》の悲しい抵抗も尽きるときがきた。

《幼児的自我》はついに《新しい自我》に意識の中心の座を譲り渡したのだ。その瞬間、カムパネルラは消失したのである。

以上がジョバンニの《幼児的自我》と《新しい自我》の交代劇の全貌である。

私がこの物語にみたジョバンニの成長とは、以上のようなものであって、宗教的な特別な成長ではない。誰もが通る道なのである。欺きや裏切りなどの激しい形で現れることはそう多く

ないかもしれないが、親友だと思っていた者が、恋人だと思っていた者が、完全な信頼を寄せていた者が、自分から離れていったという経験は誰もが持っているものではないだろうか。そして自分の思いと他人の思いとが違うことに気づき、人間は思うようにならない現実を認識していくのである。これは成長には違いないが、いわば悲しい成長である。しかし世の中の全てが疑いもなく自分を愛してくれていた幼児的な世界から、一歩踏み出すためには、人間はこの悲しい成長を乗り越えなければならぬのである。

『銀河鉄道の夜』はこのような悲しい成長のファンタジックな形象化であり、この作品が宮澤賢治の代表作として多くの人々に愛読され続けているのは、誰もが通り過ぎるジョバンニの成長の普遍的な悲しみが、人々の心を打ち続けるからではないだろうか。

注1 西田良子『宮澤賢治論』五十九頁 桜楓社

注2 多田幸正『賢治童話の方法』二七二頁 勉誠社

注3 「歌稿B」表紙に、「少年小説／ポラーノの広場／風野又三郎／銀河ステーション／グスコープドリの伝記」というメモが残されている。「銀河ステーション」とは本作のことであると思われる。

注4 フロイト 懸田克躬訳『精神分析学入門』五〇九頁 中公文庫

(うちだ ひろし 通信教育部四年)